

A close-up, artistic photograph of a traditional Japanese futon. The futon is composed of several layers: a dark blue or purple bottom layer, a white middle layer with a ribbed texture, and a thick, golden-brown top layer. A wooden scoop is positioned over the top layer, with a small amount of liquid dripping from it. The background is a textured, dark brown surface, possibly a wall or another part of the futon. The overall lighting is warm and dramatic, highlighting the textures and colors of the futon.

寢床屋の無料配布

・ 榎田 恐るべし …… 3

「姐さん」

窪塚はそう呼びかけて、こちらを向いた給仕の女性に空になりそうなチロリを掲げてみせる。

「はあい」

返事と共に女は棚から空きのチロリを取り、蓋を割った一抱えもある大きな酒樽から酒を汲み入れる。そして、爛をつけるために静かに湯気を上げる釜にチロリを漬けた。

酒屋が酒を売る一方で、酒肴を出して店の一角で吞ませる一杯飲み屋である。元々試飲を兼ねて道行く人に一杯だけ売る立ち呑みをやっていたのが、次第につまみを置くようになったというワケだ。小上がりの座敷はなく、土間に床几を幾つか並べただけ。一つの床几に二人座って、それぞれその脇に酒や肴を置けば目一杯だ。都合十人も入れば満席である。

だが、立地のせいか、扱う酒がやや高めのせいか。割に人が少ないので、知る人ぞ知る飲み屋でもあった。床机を独り占めしても文句の出る気遣いもない。

店にはどこぞの本店の隠居のような老爺が一人。町人風の風体をしているが、恐らくは参勤交代で江戸に出てきたと思しき二人連れの侍が一組。先程給仕の女に「お頼み申す」と呼びかけをした。いつもは相手が誰だろうとお侠な言葉遣いをする女が、「アレサ、随分とご丁寧だノウ。はい、ご注文は何でございます」とくすぐったそうに答えさせていて、あの男勝りに言葉遣いを変えさせるとは中々に興味深かった。

その後に酒のおかわりを頼もうとした老爺が「ではこちらもお頼み申しましょうか」と言つたので、「鬨るんじゃアねえヨ。エエモ、好かねえ！」といつもの調子に戻つて、店中がくすりと笑つて和らいだのも、普段は酔っぱらいを怒鳴る女中の啖呵か、爛をつける大釜がふつふつと湯気を上げる音が聞こえているのが多いような静かな店には珍しい光景だった。

窪塚は肴に出てきた里芋の煮物をひとつ口に放り込む。濃い醤油の味にねっとりした里芋がホツとする。本来は自分の店が扱う酒を広く知ってもらうためのこうした飲み屋だ。肴など酒を吞ませる添え物であつて、例えなくても誰も文句は言わない。味

噌か古漬けの香子かうこを刻んだものでもあれば上等と言う部類だ。だが、この主人はこの一杯飲み屋のために、どこぞの料理人だった男を雇ったらしいと聞いた。そのせいか、その時々季節ものが出てくるし、味付けも中々のものだ。

「お待ちどう」

爛のついたチロリを鍵棒で引っ掛けて、給仕が窪塚の床几にトン、と置く。そして、空いたチロリを回収して行った。

「オオ、待ちかねた」

窪塚が早速チロリに手を伸ばして、酒を猪口に注ぐ。程よく温められた酒精が喉から胃の腑へ落ちていく。それを追いかけるように身の内から熱が広がって行くような気がした。

「随分とご機嫌ですね」

目の前に人が立ち、声が掛かった。見上げて言葉を失う。

「な……」

自分の幼馴染であり、火附盗賊改の頭領の用人を務める榎田が、ニッコリと微笑んで自分を見下ろしていた。

「榎田……さん」

思わず相手の名前を呼びそうになって、自分の目的を思い出して声がごによごと小さくなる。用人の榎田に話しかけられる時は、いつも掛かかりが嵩みすぎだと小言を食らう事が多い。その条件反射で、不味いところを見つかったと思っただが、はたと今日は違ふと思ひ出した。ちゃんと自腹で払うつもりで来た店である。

いやいや、そればかりじゃアねエ。

ここへは探索の一環で来ている。ちよつと後ろ暗いところがなくもない、侠客と言ふのが窪塚の役どころだ。武家だと言ふのはもちろん。ましてや火附盗賊改の与力だなんて判つてしまつては困るのだ。窪塚は目の前の存在にどう対処すればいいのか、必死で考える。

「ああ、ご一緒しても？」

榎田は羽織に袴、大小を腰に差してまごうことなきお武家様然とした恰好だ。そんな男がこんな一杯飲み屋に来て、なおかつ侠客に声を掛けるなどあり得ない。どう考へてもおかしい。

「……おいおい、まさかたかりかエ？ お武家様が？ 座りてエなら他にも空いてる

ぜ」

窪塚は覚悟を決めて、役を貫き通すことにした。ここに来るはずのある男を待つてゐるのだ。その男は商家ばかりを狙つて盗みに入る男だ。

店の主人、女中、そして常連らしき老爺はおそらくその男を見知つてゐるはずだ。窪塚がおかしな動きをして、その話を客にしたとしたら。それがその『ある男』の耳に入つてしまえば、また行方をくらましてしまうかもしれない。

「おや、心外ですね」

榎田は心底驚いた顔をする。

乗つてくれたか。

窪塚がホツとしそうになつたその油断を、榎田がすかさず突いてくる。

「掛をお頭に払つてもらふのは、たかりとは違ふと……？」

そねエにデケエ声で！

今見えているような、遊治郎とは違ふとわかつてしまふではないか。

だが、そんな抗議も口から出ることなく終わる。

普段は寝ているのかと思うほど伏せられた目が、重たい地響きを立てて開かれよう

としていたからだ。榎田の目が見開かれる時は、怒っている時なのである。

さあつと血の気が引いていくのを感じながら、窪塚はちらりと横目で入り口との距離を測る。が、榎田が進路を塞ぐ形で立っていて、逃げることもできない。

だが、ある意味上司と言つてもいい立場の人間から逃げたりすれば、流石に今後のお勤めに支障があるだろう。

「さて、賢明なあなたなら、何故私がここにいるか、お判りですよね？」
お判りである。

と言うか、この状況で判らないわけがない。

たまたま、などではない。

榎田がここにいるのは、窪塚が何を探っているのか、全て知っているからだ。その上で、掛が高まらないように注意しに来ているのだ。

何をどうして、どう知ったのかを是非とも尋ねたいところだが、素直に答えてくれるはずもない。

「イヤサ、これには…」

虚しいと悟りながら反論を試みようとしたが、他の客の耳目が、窪塚たちに集まっ

ていた。

「なんだろねエ」

「お前さん、店のダンナを呼んでおいで。万が一があっちゃアいけない」
女中と老爺が話し合う声が聞こえる。

「不埒者だべか」

「ナニ、慮外するなら、懲らしめてくれるべえ」

参勤者の二人連れまでがそんな話をしている。

「ここじゃア込み入った話もなんですから、ちよつと河岸を変えませんか？」

恐ろしいほどにこやかに微笑む榎田に、窪塚は背筋がゾツと悪寒に打ち震える。碌でもない「込み入った話」の予感しかしない。こう言った時の榎田は、窪塚が誰を追つていて、どこで張り込んでいるのを把握している。そのうえで、より確実な——そして勿論掛の少ない——手段を取れと、それはそれは懇切丁寧に提案してくるのだ。

いや、窪塚だって考えうる手はきちんと検討した。それは自信を持って言える。

榎田が言うのは、その中でも一番キツくて、それしか手が無いなら仕方ないかと、些か腹を括るのが必要な手段ばかりなのだ。

今までそう言った手を避けてばかりかと言えば、そうではない。何度だってやったことはある。屑買いに下肥買い、お菰こも——お前のような見るからに頑丈で健康そうなお菰がいるかと言われたが——だってやってやってきたのだ。寒空に船頭や漁師だって厭わなかった。毎度毎度贅沢ばかりしているわけでは、決してない。

「なんの騒ぎなんですか？」

女中のご注進に主人が店に出てくる。普通は主人も店にいるものだから、少しの間女中に店を任せて奥で晩飯でも食べていたのだろう。

「ああ、いえナニ。家出中の駄々っ子を諭していたのですが、お騒がせしてしまいましたね」

榎田が申し訳なさそうに微笑む。その顔に火吹き竹を握りしめていた女中がホッと胸を撫で下ろす。全くのお侠である。

「凶体と駄々ばかり一人前でしてね。お父っ様の気苦労も大抵のことじゃございませ
ん」

そつのない言い訳を榎田がする。とは言え、どこぞのお坊ちやまの我が儘を窺める役どころは、代わり映えも恥ずかしくなるほど使い回しし過ぎて擦り切れてるぜと指

摘したい所だ。まあ、悔し紛れだとしても、今の状況では恐ろしすぎて口に出来ないのだが。

「男の息子なんぞそんなものですよ。ナニ、恥ずかしながら儂にも覚えがありますわい」

「んだなア。悪さも随分したもんだあ」

「おめサ、ソリヤア鳴らしたもんだなア」

「コレサ、そりやおめもおんなじだろが」

老爺と参勤者達が笑う。ここまでされてしまつては、窪塚がここに残るわけにもいかない。してやられた、と言うところである。

「わかつた、わかつた。わかりましたよ。その話とやらを聞きゃアいいんだろ」

窪塚はさつさと店を出ようと、懐に手を入れながら立ち上がる。

だが、財布を取り出そうとして懐を探るが、その手がひたすら空を掴む。財布を入れてくるのを忘れたのだと気付くや、さあ、と血の気が引く。

「どうしたんです？ 早く勘定なさい」

榎田が怪訝そうに言う。それを聞きながら、窪塚の頭は何か策はないか、どうしよ

う、と忙しく働くが、ないものはない。やむなし、と判断する。榎田の機嫌が更に悪くなるのを覚悟したものの、口がどうしても重くなる。

「どうしました」

榎田の調子にやや剣呑さが増す。

ええ、ままよ。こんな注目されているのは、どうしようもない。窪塚は早々に逃げ出していった覚悟を掻き集める。

「……榎田さん。何某か用立て頂きたく……」

「は？ 今なんと？」

びっくりしたと言うより、聞き捨てならないことを聞いたと言う苛立ちが、榎田の言葉に混じる。

「いや、だから……。財布を忘れて……」

寝ているかと思うほどに細い目が、ゴゴゴゴ、と地鳴りを上げて開こうとしていた。

「ちが……！ ちゃんと払うつもりで！ 財布が……、うっかり……」

一刻も早く手短に真実を伝えねばとしたせいで、おかしい片言になってしまふ。だが誓って本当のことである。

「若様は財布なんぞ持ちなれないと仰る？」

完全に見開いた槇田の目は、全てを見通すような奥底のしれない、いや覗きこもうものなら黄泉の底にでも繋がっていきそうなぞつとする眼差しで窪塚をねめつけた。声が笑っているだけに、余計に恐ろしい。しかも、他の客たちには愛想のいい声だけしか見えていないのだ。

「やれやれ、随分困った息子殿だのう」

老爺達が笑う。こつちがどれだけ恐ろしい思いをしているかも知りもせずに。自業自得かも知れないが、ここまで恐ろしい目に遭う謂れはないはずだ。

「罰として、ここで下働きでもしていきなさい」

その言葉が沁みた瞬間、咄嗟に店主を見た。その窪塚の視線から、店主はふい、と気まずそうに目を反らした。それを見て窪塚はやられた、と思った。槇田は端からここで働かせるつもりだったのだ。

「折角ですから、働きぶりを拝見しましょうか」

一方の槇田は、うすら寒い笑みを浮かべると窪塚を手で追い払いながら、最前迄本人が座って居た床机に腰を下ろす。

「う、裏で薪を割つとくれ」

主人が躊躇いながらもそう言う。

「サ、賄いでありつきたきや、ちやつちやと済ましといで」

女中が拝むような顔つきで窪塚を店の奥へと押しやる。それで窪塚は同情するような気持ちになった。この店の弱みを榎田に握られているのだ。窪塚がこの店を選んだ時には、気が付かなかつたものだ。むしろ、目的のために都合が良いだけで、この店自体を深く調べなかつた。

けして窪塚が杜撰だつたのではない。榎田は一体どこから調べ出して来たのか。まるで閻魔の浄玻璃の鏡か閻魔帳でも持っているのではないか。閻魔と友達なのではないだろうか。いや、榎田のことだ。例え閻魔でも情け容赦なく弱みを握って、脅してに違いない。

窪塚は、女中に押し出されるように奥へ向かいながら、榎田恐るべし、と改めてぞつとしたのだった。

0123# エアブー

寝床屋の無料配布

2022/01/23 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

用人の槇田は怒らせてはいけない、と言う不文律が存在する、火附盗賊改と言う設定は、わりと自分でも気に入っています。泣く子も黙る怖いお頭も決して槇田だけは怒らせないように気を遣っていたりします。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。